

LH です。6/11 の回答について、さらに質問させていただきます(2010/06/14)。

〔質問〕1

そもそも和辻哲郎の日本文化論の核心的なものは何ですか。恥しながら、和辻の書物は読んでいないので教えてください。

〔回答〕

和辻哲郎の哲学全体の根本にある観念は「宇宙生命」というものだと思います。これはごく大雑把に言えば、19 世紀後半から 20 世紀前期にヨーロッパの物理学の世界で、宇宙や世界全体の根本を「アトム」のような粒子ではなく、「エネルギー」の現われとして考える考え方がさかんになり、それに刺戟されて、生物学や人文学のなかに、「宇宙の生命エネルギー」を考える動きが出てきたことを日本で受けとり、ヨーロッパやアメリカよりも盛んに多彩に展開し考え方です。これをわたしは「大正生命主義」と呼んでいます。

和辻哲郎もその主要な担い手のひとりで、彼の最初の書物『ニイチェ研究』(1913)に、はっきりそのような考えが記されています。そして、この考えを和辻哲郎は終生、変えなかつただろうと思います。

これについては、鈴木貞美「和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術観—『ニイチェ研究』をめぐって」(『日本研究』第 38 集、2008、日文研の鈴木ホームページからダウンロードできます)で論じました。和辻哲郎はとくにベルクソンの「宇宙の生命エネルギー」という観念を受け取り、その哲学観をつくったこと、それには西田幾多郎『善の研究』(1911)も働いていることや、わたしなりにニーチェ哲学の核心部についても論じてあります。これはわたしの『生命観の探究』ののちの論考で、それまで未解明だったところでした。そして、これはわたしが「大正生命主義」の研究をしていたから気がつ

いたことです。和辻哲学の研究者の中に、これに賛同してくれる人がどれくらいいるのかは、よくわかりません。

『ニーチェ研究』の後書きで、和辻哲郎は、日本文化のおおもとにニーチェのいうディオニソス的な生命の表現を見出そうとする構えを示しています。そして各文化圏のアーキ・タイプを探り、よく知られた『風土』(1935)で、東アジア的特性、その中での日本の特性を論じたのち、前回の回答に書いたように、日本文化の重層性を論じたのです。

山崎正和氏は、このうち、文化の特質を風土的環境に求める『風土』を環境決定論のようにして、あっさり退けています(p.37)。和辻の日本文化の重層性論は念頭においてないようです。

和辻哲郎『風土』序文には、人間が向かいあう自然環境のことで、その交渉の仕方が「存在の契機」になると述べていたと思います。「契機」はモメントの訳語ですから、いわば民族性、国民性の方向と力の量をつくりだす条件のよう考えています。人間の主体性を排除した環境決定論のように考えることはできません。

和辻は、ある文化圏の特徴的な傾向として、そこに暮らす人びとの「気質」を考え、「風土」とのかかわりに求めたのです。19世紀を通じて国民性は「気質」に求められていました。和辻は、それらを文化圏にひろげ、一種の文化類型論を展開したのです。

なお、作者の才能に加えて環境を問題にしたのは、フランスのイポリット・テーヌの文学・芸術論ですが、これが環境決定論のはじめとされています。が、作家の個性もとりあげていますから、厳密には環境決定論ではありません。

【質問】2、 山崎正和は「文化について、最も広くもたれたイメージは、それが土に根

ざしたひとつの生命体であり…」というが、「文化」の語源からすれば、人が自然「nature」に手を加える(=耕す 英 cul)ことからきたものでしょう。だとすれば、「土に根ざしたひとつ生命体」の「土」は「nature」、つまり「環境」「自然」のことではないでしょうか。また、「生命体」は人間のような有機体のことと考えてよいですね。

〔回答〕 はい。そのとおりです。

〔質問〕2-1. 回答①に「国家有機体説は、中国漢代にもありましたが…」とあるのは、もしかすると、以前、教えていただいた漢代の董仲舒の『春秋繁露』のことでしょうか。

また、デュルケームについてですが、元中国人で、後天安門事件を経て日本留学を決め、現在日本に帰化した石平氏のブログに、フランスの学者のデュルケームは社会有機説を唱えたが、実を言うと、その考えは孔子の「礼の用、和を尊ぶと為す。王の道、斯を美と為す」によっていると記されていたのを読んだことがあります。そのデュルケームのことですね。

〔回答〕 はい。そのとおり。

デュルケームが孔子を引いているのですか？ 知りませんでした。もし、そうだとすると、董仲舒『春秋繁露』を知っていて、遡ったのでしょうかね。ここに引かれている孔子の言葉に、有機体、言い換えると生命体の意味はないですから。

ついでにいうと、この孔子の言葉が、聖徳太子の唱えた「和をもって尊しとなす」の原典でしょう。

フランスではデュルケームの前に、コントが、社会問題、つまり階級間の闘争に対して、宗教でも、理想でも解決できない、社会の現実と面と向かうべきだと唱えたとき、

社会有機体論をとっています。デュルケームは、それを受け継いだのです。もっと前には、J.J. ルソーが、あくまで比喩だと断りながら、述べています。くわしくは『生命観の探究』に記してあります。董仲舒『春秋繁露』についても。

〔質問〕3. 同じく①の最後の部分に当たるところで、「しかし、日本の場合は、そうはいきません。儒学を抜きにしては、実は本居宣長の考えも成り立たないのです」とあります。僕には、非常に衝撃的な話です！ 具体的に教えてください。あるいはどういう関連の書物を読めば、それが分かるのか、教えていただければと思います。

〔回答〕 本居宣長の「ものの哀れの説」は、人間にとって最も大事なものは「理」ではなく、「情」だというものです。 「ものの哀れ」が元禄時代の町人階層に流行していた「骨肉の情」や「男女の情」を重んじる風潮を受けたものであること、荻生徂徠の弟子のなかには、「情にとられる女々しいことこそが人間の本性だ」という人も出ること、宣長が朱子学を学んだ先生、堀景山は「だから、情にはよくよく気をつけなければならない」と警告していたのですが、宣長がこれを逆転し、中国の「理」に対して日本の「情」を対置したことなどは、京都大学の日野龍夫氏が新潮古典修成『本居宣長集』の頭注に書いています。つまり宣長の「ものの哀れ」は、朱子学の教えを逆転して、つくった考えなのです。

そして、宣長は「中国でもともとそうだったが、のちに理が勝つようになった」という意味のことを述べています。これは、『詩経』について孔子が述べた「思邪無」について、伊藤仁斎や徂徠が「民衆の心には邪なことはない」と朱子らとは異なる解釈をしたことを学んで、「そもそも、どこの国の民衆の心ももともとは素直なものだ」と宣長は考え、「その後、中国では儒学や仏道がさかんになったが、日本にはそれが保持され

ている」と主張したのです。日本では、民衆の心に仏教が沁み入っていることを十分承知していながら、そのように主張したのです。つまり、宣長の考えは、孔子の「思邪無」がおおもとにあり、また朱子学を逆転してつくった考えなのです。そのことは、『生命観の探究』にまとめてあります。

そして、そもそも人情を重んじる風潮は、中国明代の商人層にも見られるもので、そのなかで李卓吾(1930年代の中国で陽明学左派と呼ばれるようになります)が唱えた「情」に立ちながら聖人に至る道を歩むという考えが日本に伝わり、元禄期の町人層の風潮を支えたとわたしは考えています。

『探究』以降もいろいろな資料にあたって、その確信を深めています。禅宗の「五山」と呼ばれる寺(京都、鎌倉)には、朱子学、陽明学、「陽明学左派」の思想が伝えられたことはまちがいない、そこからひろがった跡が見えます。そういうわけで、陽明学や「陽明学左派」の考えをふくめて、宣長の考えも、様々な儒学の考えなくしては成り立たないのです。

【質問】4. 回答⑥について、山崎正和の文章の続きを読むと、また質問がわいてきます。山崎は、こう述べています。

「スペインの闘牛では、犠牲の牛を殺すことにゲームの眼目があり、哲学者のオルテガ・イ・ガセットがその文化的意義を擁護してゐるほどだが、ポルトガルでは牛を殺すことを嫌い、もっぱら闘牛士の勇気を誇示することを主眼とする、といはれている。

注目すべき点は、かうした国民の特性が短期間の産物だというだけではなく、少なくともそれを作った最初のきっかけは、相当人工的、意識的人間の努力であったといふことだらう。いうまでもなく、文化はあくまでも自然に似た一面を持ち、生命体として自

発的に育つ側面を含む者であって、人間がその全体を計画し、意識的に作り上げられるものではない。人間は文化のなかに生まれ、文化に運ばれて生きる存在であり、人間の意識それ自体が文化の産物だ、といふ反面の事実を無視することはできない。だが、それにもかかはらず、たとへばポルトガルの場合、その建国闘争の戦略、初期王朝の統治の手法などが、明らかに意識的に、スペインとは異なる国民の形成をめざしてゐたことも、疑へない。宗教上は、カトリック諸派のなかでも、新興のイエズス会と結び、政治的には、欧州内陸の覇権を諦めて海洋進出に専念するのであるが、かうした意識的な非スペイン化の努力が、やがて間接的に独自文化の生育を方向づけたことは、十分に想像できるだらう。」

【質問】4-1. これについて、「文化はまず自然に似た一面をもち」などから、和辻の説をとりあえず引き出し、後での批判の準備を立てると僕はとらえています。自分としては、ある程度は「文化はまず自然に似た一面を持つ」に賛同します。最初の1と部分的に重なりますが、文化の自然の一面を教えてください。

そして、「人間は文化の中に生まれ、文化に運ばれながら生きる存在であり、人間の意識それ自体は文化の産物だ」について。まず、「人間は文化の中に生まれ」は、神話などを絶対に信じておらず、もっぱら「進化論」の支持者と考えてよろしいでしょうか。また「文化に運ばれながら生きる」は、人間は文化に支配される、我々の誰もが文化無しでは生きられない、ということでしょうか。そして「人間の意識それ自体は文化の産物だ」は、物心両面の広い意味での文化であれば、「心」にあたるのが我々の意識、たとえば言語、思想などと考えてよいですか。

【回答】 引用文について原著にあたってみました。下線部の「反面」は「半面」でした。そのほかのところは、文字づかいなどのちがいがも原著にしたがって直しました。

貴兄の写しちがいでなければ、典拠にしたものが原文を改変してあります(ついでに前回の引用文も原著どおりに直しておきました)。

ここで、山崎氏は、文化の半ばか、それ以上は、「自然に似た」、また「生命体に似た面」をもつが、別の半面は、意識的につくられるということを述べているのです。「自然に似た面」とは、その中にいる人間に意図して簡単に改変できるものではないという意味です。先にも述べましたが、山崎氏は還元主義を批判しているので、和辻だけを批判の標的にしているわけではありません。

「人間は文化の中に生まれ、文化に運ばれながら生きる存在であり、人間の意識それ自体は文化の産物だ」の意味は、個々人は、ある文化の中に生まれ、育ち、その文化と命運をともにする。個々人の意識自体が、彼ないし彼女が属している文化の産物なのである、という意味です。要するに個々人は、その属する文化環境に規定されるということを言っているのです。

貴兄は、「文化」を神話や宗教と対立するものと考えているようですが、ここでは、神話や宗教をもふくむ生活習慣全体のことを指しています。

それから、神話や宗教を信じていない人は、みな進化論者だと考えるのは早計です。そもそも生物学ととりくんできた人びとのなかには聖職者もたくさんいます。ヨーロッパの自然科学自体が、神の摂理の素晴らしさを証明するために発展してきたものといつてよいのです。

そして、キリスト教では、人間の理性は神に与えられたもの、それゆえ万人がもっているものとされています。それがヨーロッパの合理主義のおおもとです。東洋の「理」は「天」の理ですから、自然そのものが備えているもので、そこが大いにちがいます。

貴兄の解釈について、「文化なしでは生きられない」はよいとしても、「支配される」

は、自分の自由意志によって別の道を選べないという意味になりますから、言いすぎです。山崎氏は、「半面」のことを言っているわけですから、「規定される」(が、決定されるわけではない)という意味にとってよいでしょう。

「人間の意識それ自体は文化の産物だ」が、物心両面の広い意味での文化であれば、「心」にあたるのが我々の意識、たとえば言語、思想などと考えてよいですか、という質問について。「物心両面の広い意味での文化」の意味でとってよいと思いますが、「意識」は、その物心両面に反応しますよね。そのことを言っているのです。そして、「意識」も脳をはじめとする生理的なはたらきによるものです。また言語は音声や文字によって他者へと運ばれるものです。ともに物質性を離れて存在しません。

【質問】4-2. 文化は自然の一面を持ちながら、そうではない面、「人工」によるところもあるという例にしている「欧州覇権」や「新興のイエズス会」などに限って言うと、それらは果たして「文化」と考えたほうがいいのか、それとも「政治」と考えるべきでしょうか。

【回答】

山崎氏の文章では、宗教と政治を分けていますね。「文化」は、それらをまとめた大きな概念として用いています。「文化論」の「文化」をはじめとして、こういう「文化」の用例も多くあります。このように概念間の関係をつかまないと、相手の文章を理解できないことになります。

それが、わたしが概念組織、編成が大事といっている大きな理由です。個人の考えだけでなく、時代と地域の概念組織が了解できずに、誤解したり、無理な非難が繰り返されたりしてきたのですから。

【質問】5 関連することですが、中国では、かつての「人定勝天」(人は必ず天に勝つ)から「人来自于自然, 并且改造自然」(自然の中から我々が生まれ、またこの手で自然を改造す)へと考えが変化していると思います。僕は、山崎氏の「文化の中に生まれ」より、この「自然の中から生まれ」の方が自然だと思います。彼は「自然」を「文化」の次元の下と考えるのでしょうか。それにしても、どうも「文化の中に生まれ」はすこし妙に感じます。

【回答】 これも先の回答と同じです。山崎氏の文章、その概念の関係を考えずに、貴兄は自分の概念で読むので、そこで言われている意味が理解できないのです。山崎氏のいうのは、人間はふつう親たちが身につけた文化の中に生まれ、育つという意味です。

「人定勝天」は、巖復がハックスレーの「進化と倫理」の翻訳序文に由来するものだと思います。それは、人間は、相互扶助という生物の本能(天理)によって、生存闘争という生物の本能(天理)を制御すべきだという意味でした(これも『生命観の探究』に書いてあります)。

貴兄のいうのは、大きな風潮や傾向の変化なのでしょうが、そのふたつは、根本のところでは別の考えに立っているわけではありません。そして、「改造自然」のやり方のちがいに、それぞれの「文化」のちがいが出てくるわけです。その意味では、山崎氏の考えも大差ありません。

【質問】5-1. すぐ下の記述はこうあります。「同じことを別のかたちで示すのが、完全な人工の国家アメリカの文化であって、徹底して意識的に設計されたこの国におい

でも、文化はそれに方向づけられながら、しかしやはり、意識を超えた自発的成長を見せたのである。たとへば、人間関係が平等であり、開放的であり、実際的であることはこの国の意識的な理想であるが、そこから生まれたはずのファースト・ネームの呼び方は、決して意識的に理解できる制度ではない。ある人物に向かって、上下、親疎の程度を考慮して、いつそれで呼びかけるか、さらに、それよりも親しげなニック・ネームにいつ呼びかへるかは、この国に長く住まなければ掴めないほど、微妙な暗黙の常識的な判断を必要とする。それは、誰の計画にもよらず、何らの契約にもよらず、まさに土から芽生えた自然の契約のやうに見える習慣であるが、それがあの契約社会のなかで育つのに、多分百年はかからなかったのである」。

これは、まず、「同じことを別の形で示す」のであれば、むしろ同じポルトガルを例にするのがもっと説得力があると思います。筆者には、「文化」という全体の概念が働いているわけだから、そう考えても無理はないでしょう。これについて、一言お願いします。

アメリカを例に出すのはあくまでも「文化」の「人間離れ」の恣意性を説きたいと、とらえています。そこで、「ファースト・ネーム」の登場となり、「この国に長く住まなければ、つかめないほど」だ、とあります。一体何が話したいのか、さっぱり分からないのですが。

〔回答〕 これはポルトガルの例にならべて、「完全な人工の国家アメリカの文化」においてさえ、意識化されにくい、その意味で「自然に似た」習慣が出来たということを示したわけです。人為的な文化にも「自然に似た面」があることを例証しているのです。

言葉についても、なぜ、そのような言い方をするのか、説明不可能なことはいくらで

もあるでしょう。感嘆の表現が、なぜ、ある種の場合は「アー」で、「アオー」「ウー」「オー」ではいけないのか、はっきりした理由はなく、その集団内で習慣的にそうなっているとしかいえないことは多くあります。

ただし、それを「自然に似ている」と考えるのがよいか、どうか、は別問題です。

また、アメリカにおいてニック・ネームで呼び合うのは、多くの場合、互いに間で了解しあってはじめることで、そのような関係であることを第三者が見ても理解できないような場合は、アメリカ人の間でもいくらかあるようです。ですから、ここにあげるのが適当な例とはわたしも思いません。

【質問】5-2. そして、結論的には「さしあたって明白なのは、したがって、文化は人間の計画的支配を超えてはみても宿命ではなく、自然の生命体に似てはいても、人工になじむということであり、いはば、文化には両義的な性格があるということであろう。繰り返していへば、文化とは、人間の手で作られながら人間を乗せて運ぶものであり、それ自体の同一性を保ちながら、一定に範囲内で人間の操作を許すものなのである」とあります。ずいぶん都合のいい結論だなと思います。これじゃ、もともと明白ものが分からなくなってしまう。だいたい、「一定の範囲内」とは、どこまでは手つかずの状態、どこまでが手を加えていいのだろうか。これについて意見を聞かせてください。

【回答】 山崎氏のいうのは、風俗習慣は人為によってつくられたものだが、人為によって操作できるとはいえないということです。「どこまで手を加えるか」というように操作ができないところがある、ということです。

人間は、意図したことが実現できるとは限らない。本人が実現できたと思っても、他者からみれば実現できていない場合もある。集団で合意したことが、いつの間にか崩

れることなど、いくらでもあるでしょう。ごく当たり前のことで、ここに言われていること自体が、「都合のいい結論」とは、わたしは思いません。

最後に、二回の質問から感じたことで、これまで述べていないことを書いておきます。貴兄は、山崎正和『文化開国への挑戦』の中から抜粋された「文化論の陥穽」の部分だけを読んだのではないですか。外国語で書かれたものを教材に採る場合、よくそうしますが、その一部分を理解するためには、最低でも、その著書の全体を読まないとならないはずです。

なぜなら、それは、あくまでも一冊の著書の一部であり、完結した論文ではないからです。何かの全体がわからない限り、そこから切り取られた一部だけを見ても、その一部が何かわからないのと同じです。教材を与えられる学生はしかたないですが、それを教える教師は、少なくとも、その一冊は読んでいないと教えることはできないはずです。

少なくとも、というのは、より深く理解するためには、その著者がその著書の前後に書いた著作の数冊を読むことが必要です。もっといえば、その著者の全著作を読むことが望ましいのです。もちろん、教材のすべてについて、そんなことをしてはもらえませんが、そこで、人名事典や文学事典で、その著者の全体像をつかんでおくことは不可欠でしょう。

貴兄が質問してくれたおかげで、わたしは、山崎正和『文化開国への挑戦』を読み直す機会をえました。あまり熱心に読まなかったので、かつて読んだときに気にとめなかったことや、まったく記憶に残っていなかったことが数多く、見えてきました。

山崎氏は当時の「生命至上主義」の風潮にもふれています。わたしの「生命主義」

についての研究は、一九八〇年代のその風潮のただ中から出発したものです。その起源を日露戦争前後に探り、それを「生命観」の一つとして相対化するところに進み、大きな研究になりました。もちろん、まだまだ続くものです。

また山崎正和氏は、「満洲国」の「新京」で小学生のときに、中国語を日本式にではなく、中国語のとおりの発音で勉強したと書いています。これは、わたしがいまとりくんでいる「満洲国」の研究、その言語政策にかかわります。「日本人も中国語を勉強しなくてはならない」という主張は知っていましたが、実際に小学校で行われていたことは知りませんでした。

ほんの二つだけ、例をあげましたが、そのほかにも、この部分をもっと検討したい、批判を深めることで新たな研究ができそうだと感じる場所を見つけました。たくさんのヒントをもらいました。そういうわけで、今回も、「ありがとう」と、貴兄に感謝のことばを述べて締めくくりにします。

(2010/06/17)